

評者 稲賀繁美

冒険譚・学術・植民地行政 仏印考古学史とフランス東洋学の再発掘
オリエンタリストの憂鬱 植民地主義時代のフランス東洋学者とアンコール遺跡の
考古学

藤原貞朗

[めこん](#)

No.2910・2009年03月21日

アンコールワットといえば、今日知らぬ人なき世界遺産。だが日本で人口に膾炙したのは、仏印進駐の時局下での出来事だった。これらの遺跡群はいかに考古学の対象となり、学術的調査や復元は、どのように植民地政策と関わってきたのか。それは、フランス本国でも、なお体系的には問い直されて来なかった。本書は、未刊一次文書を縦横に掘り起こし、この課題に果敢に挑んだ、著者初の浩瀚なる単著である。

その成果。まずフランス主導の東南アジア考古学史を、ハノイの極東学院の活動を中心に詳細に跡付け、歴史の表層から隠されてきた舞台裏の現場を暴いたこと。第二に著者は、植民地考古学が宗主国独占下で描く地政学的歪みの恣意性を遠慮会釈なく摘出する。学術と政治が歴史のうえで濃密な依存関係に絡みとられた営みだった実態が、冷徹に、時に皮肉な観察をこめて浮き彫りにされる。そのうえで第三に、アンコールワットを代表とするクメール文明評価の変貌に戦時期日本がどう関与していたのか。その実態が、詳細に分析される。ここで、フランス植民地帝国の学術的栄光は、大東亜共栄圏による遺跡救出という物語へと変貌する。

アンコールワットは、久しく密林のなかに埋もれ、瓦礫と化した遺跡だった。そこにまず登場するのは、困難を物ともせず、遺跡から発掘した戦利品を母国へと持ち去って凱旋する冒険譚だ。その英雄となる海軍士官、レイ・ドラポルトは帰国後、招来品とレプリカによる復元恒久展示の実現に奔走する。とともに、もはや永遠に失われた遺跡原型を図面上で復元する夢に、晩年の「学術的」情熱を傾けた。だがこの第一世代の理想は、次世代によってフランス極東学院が設立されるや、急速に時代遅れとなってゆく。さらにそこには、現地で発掘や保存事業に携わる叩き上げの考古調査員と、首都で理論的構築に専念するエリート文献学者、名声ある美術史家との利害対立も顕在化する。

著者は前者に属するカバトン、ラジョンキエール、パルマンティエ、コマイユから、芸術局長として活躍したグロリエに至る、忘れられた人脈を再発掘する。とともに、現

地で不慮の死を遂げたテュフルやオダンダールに照明を当てる。これに対して、パリの東洋学者としては、第二次大戦でレジスタンス活動に挺身し、撃沈された乗船と運命を共にした傑物ジョゼフ・アッカから、「メトロポールの寵児」即ち、文明史家としても名を残すルネ・グルセと、『アンコール遺跡のバイヨン』（一九二七）で衝撃を与えたフリップ・ステルヌの業績が検討される。

ステルヌは、主として写真資料に頼りながら、バイオンをアンコールワットよりも後の建立として、従来の定説を覆す大胆な編年修正を提案した。これにより、カンボジア現地で調査にあっていたマルシャルらとの見解の相違があらわになった。追ってジョルジュ・セデスが碑文を再検討し、バイヨン13世紀建立説が確証されるに至り、古参現地調査員たちはいわば顔色を失うこととなる。

著者はアンドレ・マルローのバンテアイ・スレイ「盗掘」事件（一九二三）を、こうした路線対立の渦中に据え、保存行政の破綻を浮彫りにする。極東学院は遺物移動をマルローには禁じながら、その一方で自らは移動のみならず販売にも加担していた。マルローはパリから派遣された公認の調査員であったから、事情は錯綜してくる。彼にはいわば確信犯として、訴訟沙汰となっても自らに勝機のあることを見越して、公然と持ち出しを画策した節が見えるからである。実際、遺物保存に関する法改正は、マルロー逮捕の当日である23年12月23日付けで認可されている。これでは『王道』著者の立件を目的になされた法改正に他なるまい、と著者は断定する。さらにこの保存法改正は、遺跡の解体修復を促進したのみならず、皮肉にも、発掘古美術販売の合法化をも助長する結果となる。こうした隠された事実に関する一次資料発掘と再解釈とは、本書の顕著な成果であり、さらなる専門的議論を招くだろう。

だが本書の目的は、東洋学の政治性あるいは植民地主義的イデオロギーを教条的に告発することにはない。政治性ゆえに学術貢献まで否定するのは筋違い、と著者は言う。とはいえ学術的意義ゆえに先駆的業績を政治から救出するのもまた、問題のすり替えだろう。むしろ政治と骨絡みに発展するほかなかつた東洋学の「憂鬱」が、本研究の焦点となる。カンボジア現地調査員たちは、ある段階からは、母国の首都での世間的栄達からは取り残され、落ちこぼれの境涯に甘んじた。この日陰者の差別的階層構造に加えて、さらにそこには植民地行政の財政的問題も絡んでいた。

一九三一年のパリ植民地博覧会では、アンコールワット原寸大レプリカ建造のため千二百四十万フランの巨額が投入された。ところが極東学院が日本敗戦までの20年以上に及ぶ古美術販売で得た総収入額は、その六%に過ぎない。フランス海外植民地の栄光という幻想を演出する政治力学の前で、極東学院に代表される学術がいかに無力だったかを、この数字は雄弁に物語る。

本書最終章は、戦時下の日仏印文化協力の虚々実々に踏み込む。教授交換事業で派遣された木下杢太郎や梅原末治の関与や古美術交換の顛末を辿るとともに、本書は戦争に翻弄された学問史の闇と、犠牲になった当事者たちの姿をも凝視して

いる。グロリエはレジスタンスに関与して獄中死を遂げる。その一方ペタン政権に
担したロシア系のゴルベフは45年に病没するが、その事績は戦後ながら極東学院
の公式記録から抹消され、追悼記事掲載には一九六六年を待たねばならなかった。
考古学列伝に刻まれた時代の傷跡は冷酷なまでに鮮明だ。

(国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授)